

2005年は日本の野球界の 将来を左右する1年に

野村総合研究所（NRI）は、2004年11月にインターネット調査の「infoQ」を利用して、日本のプロ野球に関する生活者の意識についてアンケートを行った（回答者数1180人、属性や詳細データについては<http://www.nri.co.jp/news/2004/041222.html>を参照）。その結果によると、根強い人気に支えられているとはいえ、ファン離れの萌芽が見られ、改革への早急な取り組みが必要不可欠であることがわかった。

国内プロ野球は根強い人気も ファン離れの萌芽

いよいよ2005年のプロ野球が開幕する。新球団の誕生やオーナー企業の交代など、近年では例のない大きな変動を経て迎える最初のシーズンであり、プロ野球の将来を占う意味で大いに注目を集めている。

NRIが行ったアンケート調査の結果を総括すると、プロ野球への関心

は他のプロスポーツに比べて高く（図1）、特定球団を応援している人はJリーグの2倍近い全体の5割にもなる（図2）。

しかし、2004年1年間で「関心が低下した」と回答した人はプロスポーツのなかで最も多い27.8%に上り（図3）、また若年層になるほど関心の度合いが下がって、20代では格闘技に興味を持つ人の方が多くなるなど（表1）、「特定球団を熱烈に

応援するコアなファンがプロ野球人気を支える」という構造が、嗜好の多様化やコアファンの高齢化に伴って崩れていくという危険性もあり、プロ野球の将来に対しては容易ならない兆候が表れている。

世界に目を向けるファン

一方でメジャーリーグへの関心は急速に高まっており（図3）、衛星放送などによる試合中継の浸透と、毎年のように有力選手が移籍している状況に鑑みると、一般の人が見るスポーツとしての位置づけは、今後とも大きくなっていくだろう。

また、テレビなどで「積極的に見る」スポーツとして、サッカー日本代表の試合は突出して高い支持を得ている（図1）。今年から来年にかけて、ワールドカップ・ドイツ大会のアジア最終予選と本戦が続くことを考えると、より一層関心が高まっていくことが予想される。

メジャーリーグやサッカー日本代

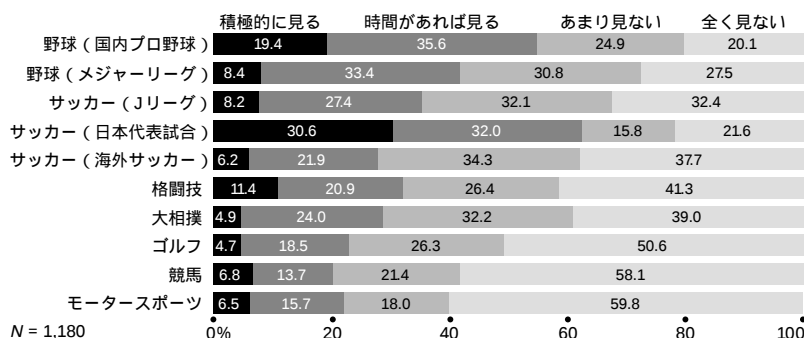


図1 テレビやラジオ、インターネットなどで観戦する「プロスポーツ」の視聴状況

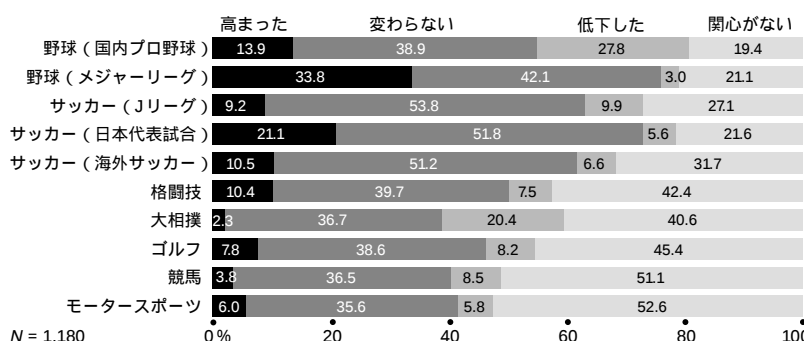


図2 「国内プロ野球」と「サッカー」Jリーグの特定の応援チームの有無

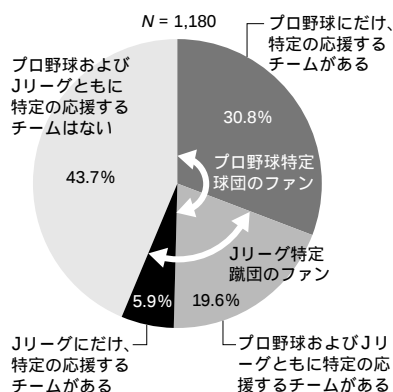
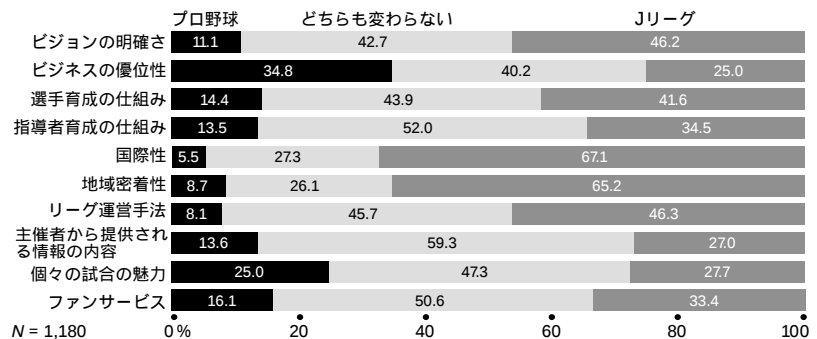


図3 「プロスポーツ」に対する過去1年間での関心度合いの変化

	19歳以下 (N = 135)	20歳代 (N = 233)	30歳代 (N = 216)	40歳代 (N = 214)	50歳代 (N = 244)	60歳代 (N = 138)
野球（国内プロ野球）	11.1	17.2	18.1	20.6	18.9	32.6
野球（メジャーリーグ）	2.2	4.3	7.5	10.3	12.3	12.4
サッカー（Jリーグ）	10.4	5.6	6.0	7.0	10.0	12.3
サッカー（日本代表試合）	25.9	27.6	32.7	28.5	33.6	35.0
サッカー（海外サッカー）	7.6	9.5	4.6	4.7	5.5	5.2
格闘技	8.1	19.7	14.8	10.3	6.6	5.1
大相撲	2.2	2.6	1.4	2.3	7.4	15.9
ゴルフ	1.5	0.9	2.3	3.7	7.8	13.8
競馬	3.7	5.2	13.5	5.1	8.2	2.2
モータースポーツ	4.4	5.6	10.4	10.8	4.5	0.7

表1 テレビやラジオ、インターネットなどで
「積極的に観戦する」プロスポーツ
(単位：%)

図4 「国内プロ野球」と
「サッカー」リーグ」の
どちらが優れているか



表への関心の高さは、アテネ五輪の盛り上がりにも共通することだが、「世界で活躍し健闘する日本人選手を応援したい」という心理を反映している。つまり、特にその競技に詳しいファン以外の一般の人、大きな関心を寄せるという構造になっている。これはメジャーリーグに関心がある人の約88%（全体の60.9%）が、「日本人選手が関係する試合・チームに興味がある」と答えていることから類推される。

改革のスタートラインに立ったプロ野球界

このような状況に対し、プロ野球界の取り組みはどうなっているだろうか。Jリーグの発足、サッカーワールドカップの開催と国を挙げての盛り上がり、メジャーリーグへの選手の流出など、幾度もプロ野球界の意識改革を迫る出来事が生じたが、これまでは国内での人気を背景に“本気になって”改革に動き出すまでには至っていなかった。

しかし、史上初のストライキの実施など、痛みを伴った話し合いを糧に、球団と選手双方によりやく意識の変化が見られるようになった。ファンの関心の低下や信頼の喪失など失ったものも大きかったが、こうした意識の変化はプロ野球界にとって大きな財産といえるのではないかな。

その結果は、すでに直接的な動きに表れている。昨年末からキャンプ、オープン戦の期間を通じて、ファンサービスイベントの実施や観戦チケット料金体系の見直しなど、全球団とも明らかにファン志向が高まっている。また、ドラフト制度や選手の年俸、契約に対する改革や透明性の確保などに取り組む機運も、労使双方に高まっている。

しかし、課題は多い。リーグ運営などに関する取り組みについて「Jリーグとの違いを聞いたところ、「ビジネスの優位性」以外のすべてでJリーグの方が優れているとの回答結果が得られた（図4）。しかも、国際性や地域密着性など大部分の項目で大差がついており、プロ野球関係者は改革の必要性和緊急性を真剣に考える必要があるといえる。

また、5年先、10年先にどのようなプロ野球界（または野球界全体）となるのかのビジョンは、残念ながら全く示されていない。球界全体の明確なビジョンや目標を示さずに改

革が成功することはあり得ないことを再認識する必要がある。

取り組まねばならない課題に対して、個々の球団で対処できることは限られているため、プロ野球界、野球界全体を見据えた取り組みが必須である。そのためには、プロとアマに分断された組織では限界があるのではないかな。プロとアマを包含し、野球界全体に対してリーダーシップを発揮できるような組織・体制を再構築すべきだろう。

2005年は日本のプロ野球界ひいてはアマチュアも含めた野球界全体の将来を決める1年になる。シーズンオフには何としても改革の道筋をつけ、日本の野球全体が発展するための展望を明確にしてほしい。多くのファンにとって、野球が盛り上がらない日本の夏はあまりにも寂しい。

野村武司（のむらたけし）
広報部広報課長
瀬戸優花子（せとゆかこ）
広報部専門スタッフ